



写真-1 左門殿川右岸堤防から阪神電鉄本線を撮影（令和元年8月）

■ 戸田氏鉄、治水にも力を注ぐ

写真-1 は、兵庫県と大阪府の境を流れる左門殿川※¹（さもんどがわ）とそこに架かる阪神電鉄・左門殿川橋梁を撮影したものです。左門殿川は、淀川の右支川・神崎川の派川で、江戸時代初期の元和3（1617）年に尼崎藩主・戸田氏鉄（うじかね）が、頻発する洪水被害をなくすために改修を行ったところ災害がなくなったため、工事を指示した氏鉄の功を称えて氏鉄の官職名「左門」に因んで「左門殿川」と呼びならわされるようになったそうです（ただ、大坂側では大坂城代の方が尼崎藩主より格上であることから「殿」を付けずに「左門川」と呼んでいたようです）。

工事の詳細は明らかになっていませんが、神崎川からの分流幅を拡張し、神崎川の場合と同様に既存水路の築堤・改修を行ったと推測されています。ということは、神崎川から左門殿川への分派量を増やして神崎川の負担を減らす一方、左門殿川では流量増に対応するために築堤を行ったということでしょうか。

かつては八十島（やそしま）と呼ばれる多くの島や洲の間を縫って流れていたいくつかの分流の中で、神崎川の場合は京と西海を結ぶ最短距離の水路を開くことを目的として改修されていますが、左門殿川の場合は尼崎城の防御的（軍事的）役割をも担うために改修されたと思われます。

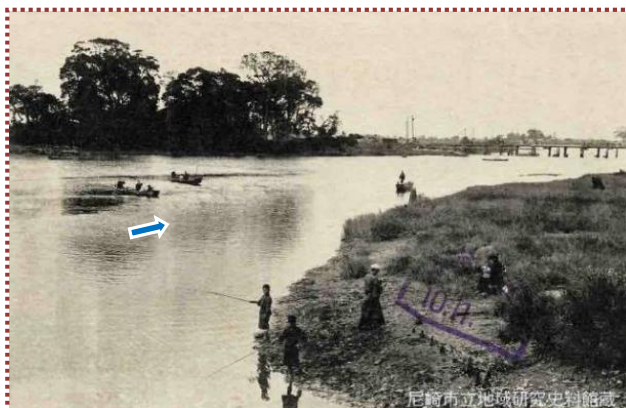


写真-2 大正から昭和初期の左門殿川（尼崎市立地域研究資料館提供）

※1 左門殿川：明治31（1898）年10月15日県告示により淀川派川認定される。区間は神崎川分流口より海まで。昭和40（1965）年3月24日政令により神崎川からの分派点より中島川への合流点までが一級河川指定される。法定河川延長2,250m。

※2 八十島：淀川や神崎川の造るデルタ地帯で、流されてきた土砂によって幾つもの島（洲）ができ、数多くの島という意味で「八十島」といわれた。平安時代から鎌倉時代まで、天皇の即位ごとに、この島々の有り様を国生みの神話に重ねて「八十島祭」が行われ、勅使も使わされたとか。「千船（ちぶね）」も「八十島」と同様に、数多くの船が行き来したことを形容したものと思われる。

■ 阪神間の大動脈・阪神国道（現・国道2号）建設の一環として左門橋を架ける

江戸時代、神崎川や左門殿川には防衛上の理由から橋は架けられず、渡しが橋の代替機能を担っていました。

神崎川・左門殿川を渡る近世から近代初頭の渡し場としては、神崎の渡しと辰巳（たつみ）の渡し※3があったことが知られています。その辰巳の渡しがあったあたりに明治末期から大正初期の頃、辰巳橋（木橋）が架けられています。右岸側にあった尼崎紡績の工場に通う人々が多く利用したと思われます。

時は流れ、阪神間の物流を担う大動脈として、大正12（1923）年12月、阪神国道建設工事が始まります。兵庫県と大阪府の境を流れる左門殿川にも橋が架けられますが、河川名と同様に、尼崎側は尼崎の基礎を築いた戸田左門氏鉄に敬意を表して「左門殿橋」、大阪側は「殿」を付けずに「左門橋」と呼び捨てにしていたようですが、最終的に河川名は「左門殿川」、橋梁名は「左門橋」となっています。

一般的に府県境の川に橋を架ける場合、費用負担協定を結んで施工はいずれかが行うはずですが、阪神国道建設については、施工延長26.7kmの約83%が兵庫県であることから、左門殿川の架橋については大阪府に任せ、その結果橋名が「左門橋」になったのではないのでしょうか。

ただ、左門橋西詰にある阪神バスの停留所の名称は今でも「左門殿橋」となっています。また、かつてあった阪神電車国道線の停留所の名称にも「左門殿橋」があり、さらに昭和2（1927）年発行の「尼崎市内及附近実測図」には、橋名が「左門殿橋」と記されています。大阪側の呼び名にささやかな抵抗をしていたのでしょうか。

左門橋の上部工は、時を経て桁自体が架け換えられ、高欄も透過性のある高欄から壁高欄になっていますが、親柱だけは当初のものが残っています。下部工（橋台・橋脚）は当初の石積み構造物が90年以上経過した今も現役で頑張っています。



写真-3 辰巳橋と尼崎紡績工場（尼崎市立地域研究史料館提供）



写真-4 阪神バス・左門殿橋バス停

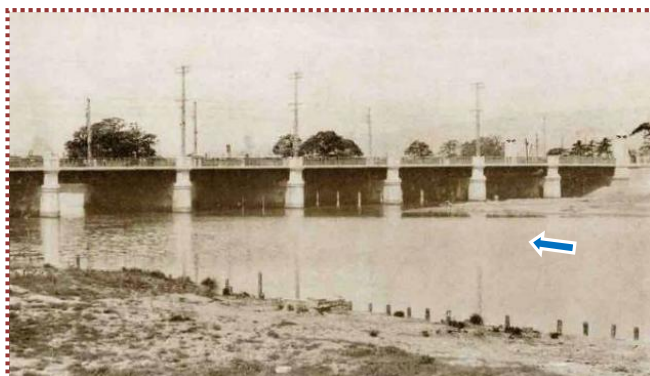


写真-5 昭和2年頃の左門橋（尼崎市立地域研究史料館提供）



写真-6 現在の左門橋（左門橋補強工事 Twitter から引用）

<https://twitter.com/samonhokyou>



図-1 「尼崎市内及附近実測図」

※3 辰巳の渡し：尼崎城から見て辰巳の方角（東南）にあたることからこの名がついたという説がある。

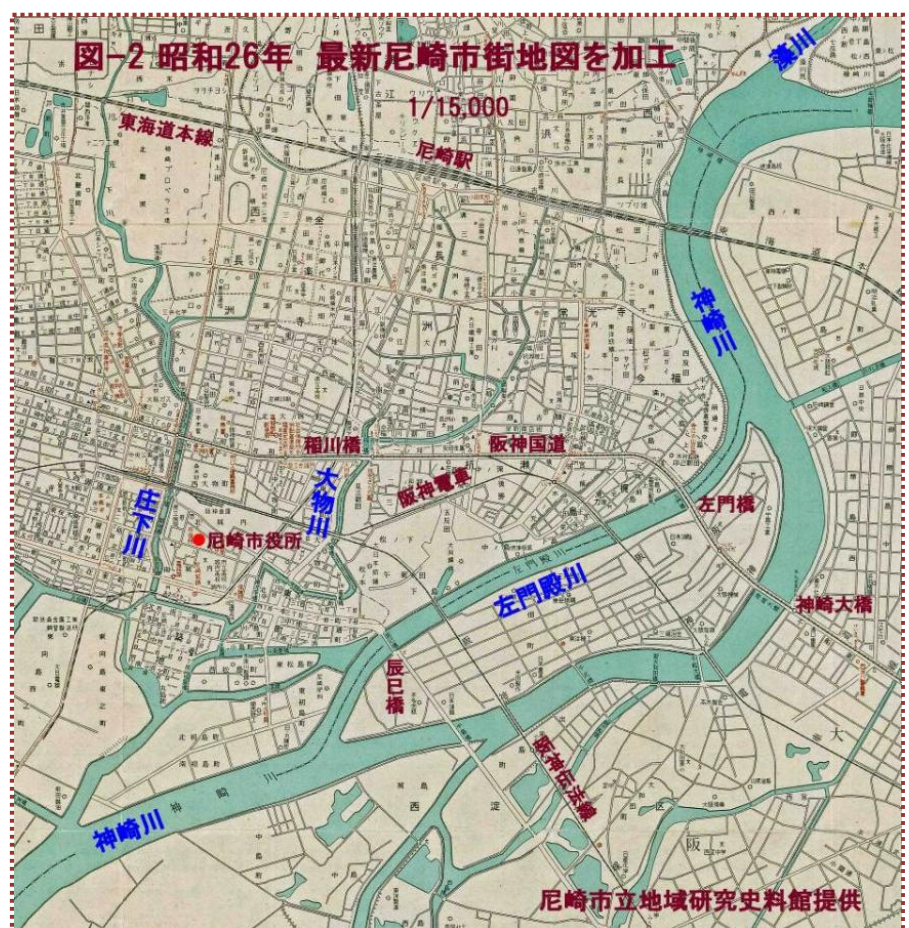
■ 昭和 11 年、左門殿川改修に着手

図-1 の『尼崎市内及附近実測図』（昭和2年3月）からもわかるように八十島と呼ばれる多くの島や洲の間を縫ってクネクネと蛇行しながら流れていた左門殿川でしたが、昭和 11（1936）年、兵庫県と大阪府は中小河川改修事業※4 に着手します。この時に、蛇行していた左門殿川が今日のようなすっきりした河道に整正されました。

その後、昭和 13（1938）年7月の阪神大水害を契機として治水計画が見直され、昭和 15（1940）年から直轄河川改良工事に着手します。

戦争による工事中断を挟み、昭和 25（1950）年に国から事業を継承して兵庫県及び大阪府が河川改修を再開します。

さらに、昭和 34（1959）年9月の伊勢湾台風を契機として、昭和 35（1960）年から「大阪高潮対策事業」に着手します。



※4 中小河川改修事業：昭和 8（1933）年に中小河川改修事業制度が発足、以降河川改修の補助事業の中心となる。現在は平成 9（1997）年度に創設された広域基幹河川改修事業に引き継がれている。

■ 左門橋防潮鉄扉こぼれ話

左門殿川に架かる国道 2 号・左門橋は、道路面が計画高潮位よりも低く、高潮堤防の“開口部”となっているため、高潮時には防潮鉄扉を閉鎖して堤内地への高潮の侵入を防止することとしています。高潮による浸水被害から市街地を守るためとはいえ阪神間の大動脈である国道 2 号を封鎖する措置は、治水・道路交通の両面において特に慎重な対応が必要な箇所となっています。

昭和 48（1973）年 3 月に設置された防潮鉄扉は兵庫県と大阪府が管理する施設ですが、操作は地元自治体である尼崎市と大阪市に委託されています。鉄扉の開閉は府県が協議の上で決定し、市職員が現場で巨大な鉄扉を操作します。関係機関が連携して操作に当たる必要があることから、毎年 7 月上旬の深夜に警察や消防も一緒になって、扉高 4.4m、純径間 20.0m、厚さ 1.2m、扉体重量 40t の可動式防潮鉄扉の開鎖訓練を行っています。

ところが平成 30（2018）年は訓練日に水防指令が発令されたため訓練は中止となり、訓練未実施のまま本番に突入することになりました。

この年、台風が日本列島に 5 個上陸しましたが、このうち、8 月 23 日の台風第 20 号、9 月 4 日の台風第 21 号、9 月 30 日の台風第 24 号の合わせて 3 回、左門橋は防潮鉄扉を閉鎖したのです。尼崎港管理事務所 N 課長によると、特に台風第 21 号では高潮が左門橋の壁高欄を越えたため、潮位低下後も尼崎側の橋上に水が溜まり“池”状態だったとか。

台風通過後、鉄扉を開放するわけですが、道路の縦断勾配を考えると溜まっていた水や流木が道路上を流れ下ることから、鉄扉を開放する前に溜まった水の排出と流木の処理を行う必要があります。そこで、縦断勾配の関係で湛水量の少ない大阪側の鉄扉を開けて消防車とバックホウを持ち込み、ポンプで水を左門殿川に排出するとともに、バックホウで橋上の流木を処理してから鉄扉を開けたそうです。

排水後の橋面には魚が飛び跳ねていたそうですが、魚は川へ帰したのでしょうか。それとも……。



写真-7 国道 2 号・左門橋（大阪側から尼崎方向を撮影）



写真-8 閉鎖中の防潮鉄扉



写真-9 左門橋上の湛水状況（尼崎側から大阪側を望む）



写真-10 消防車による夜間の排水作業

※ 写真-8～10 はいずれも尼崎港管理事務所提供

■ モノローグ

戸田氏鉄は、寛永 12（1635）年 60 歳の時に、尼崎藩での行政手腕が認められて 5 万石から美濃国・大垣藩 10 万石にご栄転となります。しかし、喜んでばかりはいられません。大垣は揖斐川の流れが複雑に入り組んでいて、輪中が多く洪水多発地帯だったので、水害が頻繁に起こると復旧に余分な出費がかさみ藩の財政を圧迫します。

氏鉄は尼崎での経験を生かし、治山治水に取り組むとともに生産性向上のために新田開発などの農業政策を推し進め、さらには人材育成（学問奨励）にも力を注ぎ大垣藩戸田家の基盤を築きました。

このように優れた藩主だったからこそ敬意を込めて“左門殿川”と名付けられたのでしょう。

因みに、「西国将軍」と呼ばれた姫路藩主・池田輝政が掘りかけた“三左衛門堀”は呼び捨てにされています。

【参考資料】

- 1 『尼崎市史・第二巻』 尼崎市役所 昭和 43 年 3 月
- 2 『淀川水系神崎川圏域河川整備計画』 兵庫県 平成 27 年 3 月
- 3 『兵庫の河川～法指定の歴史（告示集）』 兵庫県土木部河川課 平成 4 年 4 月
- 4 『尼崎百物語』 大江 篤 平成 28 年 4 月
- 5 『阪神国道線』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

※発行：令和元（2019）年 12 月 『ひょうご水百景』No.103

改訂：令和 8（2026）年 6 月 『ひょうご水百景』No.103



写真-11 左門殿川を渡る阪神電鉄なんば線